

はじめに

愛知県美術館では、木村定三コレクションの寄贈以来継続して調査研究を続け、大小のテーマ性ある展示を行い出版物を刊行することはもとより、平成20年には名品展を開催すると共に『木村定三コレクション名作選』を刊行してその紹介に努めてまいりました。この度コレクション中の銅鏡を取り上げ、その研究成果をまとめてご紹介いたします。木村定三コレクションの銅鏡は、中国・日本等を合わせて40面余におよび、特徴あるコレクションとなっておりますが、今回研究者のご協力を得て詳細な調査を行い、その成果をご報告する次第です。

木村定三コレクションの銅鏡は、個人コレクターとしての個性的な鑑識眼により蒐集されたもので、木村氏の趣向を反映した特質ある資料群となっておりますが、特に《三角縁神獸鏡》は万年寺山古墳出土と伝えられる鏡で特筆すべき資料です。同古墳から出土した他の鏡資料はよく知られていましたが、それらのほとんどが破損した状態で残されており、完全な状態のものは本鏡一面のみでした。この度の調査により、本鏡がそれら万年寺山古墳出土銅鏡群の一面であることが判明し、ながらく所在不明とされてきましたが、貴重な遺品としてここに広くご紹介することができることになりました。

木村定三氏は、膨大な量の作品を遺されましたが、ほとんどの作品はその来歴が不明で、本鏡もどのような経緯で何時ごろコレクションに入るようになったのか依然として不詳の状況です。木村氏は1932年に入学した東京帝国大学法学部に在籍中から作品の蒐集を行っていたようで、それ以降生涯を通して美術品の蒐集を行っていたのです。通常、個人コレクターが美術収集を行う場合、何らかの形で特定の画商や骨董商等の助力を得るものですが、木村氏の場合は、情報の入手や作品の選定など、その活動をほとんどご自分でされたようで、この点に氏独特の鑑識眼がうかがえるコレクションとなっている理由があります。記録の残されていない美術品について、その来歴や伝来等を知ることのできないことは、美術館として残念なことではありますが、コレクションと同時に氏の蔵書が一括して寄贈され、その中に蒐集にあたり利用したであろう多数の売立目録が含まれていることから、美術館ではそれら資料を精査することにより、蒐集に関わる情報を調査し研究して、コレクション形成の歴史の解明に努めているところであります。そうした調査は、美術品の調査と並行して順次行われており、将来その成果をご報告できる機会もあることでしょう。

ここに紹介する木村定三コレクションの鏡は、大別して中国の鏡と日本の鏡に分けられます。中国の鏡は、戦国時代から漢時代にかけての鏡が主要なコレクションとなっておりますが、他に唐時代以降の資料も含まれています。日本の鏡には、仿製鏡やいわゆる和鏡などがあります。鏡は国別、時代順にまとめましたが、資料的価値のある鏡も含めて、後学のため参考資料として取り上げたものも含まれています。

本書の刊行にあたり万年寺山古墳出土鏡についてご寄稿いただいた岩本崇氏、コレクションの銅鏡全般について調査研究を主導し目録を作成していただいた久保智康氏、森下章司氏をはじめとして、服部敦子氏やご協力いただいた関係各位に深く感謝申し上げます。